

東京大学 正 篠原 修

東京工業大学 学 小野 親一

○ 東京大学 学 窪田 陽一

はじめに —— 本研究は道路構築物が景観構成要素として出現する場合を対象として行なっている一連の景観研究に属するものであるが、景観評価の問題はそれ自体に固有の問題を抱えているため、研究成果の報告と共にこれらの問題について若干の考察を試みることにする。〈その1〉において提唱された景観へ操作論的把握モデルを対象が道路構築物である場合に適用し、根拠系を構成する人間が対象を見た時に想起する一般的・普遍的な概念(情緒の意味)を抽出することが本研究の目的である。これらの概念の体系を評価構造と呼ぶが、各対象に対する評価に関わる要因へ分析は方法的な相違から〈その2〉において行なわれた。

SD法に基づく評価実験 —— 被験者(男性10名・女性10名)に道路構築物と主景とするカラー・スライド写真24枚を提示し、その各々についてTAB-1に示すような22組の形容詞対(評定尺度)上に7段階尺度に従って評価を下させた。

因子分析法による数値的処理 —— 7段階尺度を等間

隔尺度とみなして $[-3, 3]$ の整数値をあてはめ、各写真に対する各評定尺度毎に被験者に関する平均値を算出し、これを評定得点行列とした。この行列から評定尺度間の相関係数行列を算出し、直接バリマックス法によって軸の回転を行なった結果、3つの因子軸が抽出された。

因子軸の解釈と代表的評価言語 —— FIG-1は因子軸I, IIに対する因子負荷量の総和値に基づいて各評定尺度をプロットしたものである。各因子軸の名称及び代表的評価言語は次の様なものであることが導出された。III軸までの説明力は87.6%である。

I軸 … 調和性: 17, 21

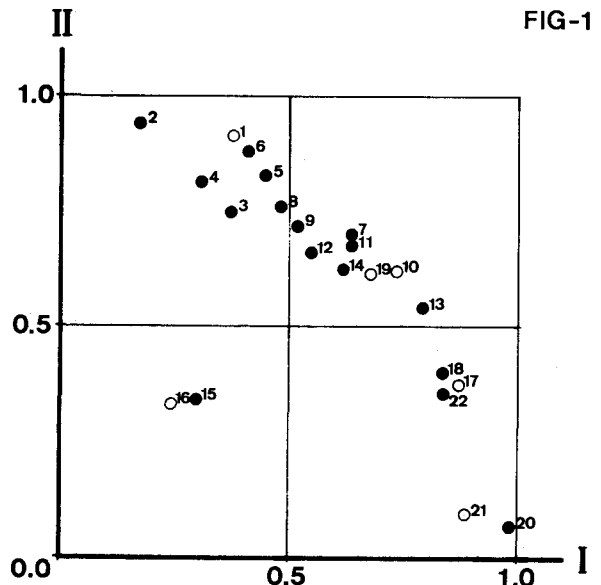
II軸 … 力量性: 1

III軸 … 力動性: 16

この他にI軸II軸にまたがるものとして10, 19を採用し、評価規定要因の分析に資することにした。各代表的評価言語の評定得点へプロファイル曲線はFIG-2に示す通りである。

TAB-1

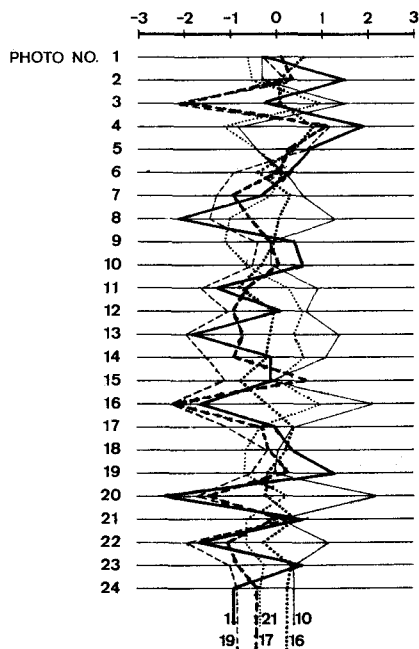
1 圧迫感がある	— 圧迫感がない
2 大きい	— 小さい
3 閉鎖的な	— 開放的な
4 高い	— 低い
5 重々しい	— 軽快な
6 支配的な	— 従属的な
7 不快な	— 快い
8 かたい	— やわらかい
9 人工的な	— 自然な
10 良い	— 悪い
11 よそよそしい	— 親密な
12 特異な	— 平凡な
13 醜い	— 美しい
14 うるさい	— 静かな
15 単調な	— リズム感のある
16 ダイナミックな	— スタティックな
17 不調和な	— 調和した
18 こてこてした	— すっきりした
19 目立つ	— 目立たない
20 ばらばらな	— 統一のとれた
21 安定した	— 不安定な
22 粗っぽい	— 細やかな



タイプ(切土・盛土・高架橋)別に同様の因子分析を行なってみたが、I軸・II軸を形成する評価尺度の因子負荷量の大きさ・順位に相違が見られたものの、評価構造そのものの相違は認められなかった。また、被験者を男女に層別して同様の検討を試みたが、I軸とII軸の抽出順位(相対的重要性)が異なるに過ぎなかった。但し、今回の場合、評価対象・被験者共にサンプル数が少ないので、以上の2点については新たに実験を行なう必要があるものと思われる。

景観評価の研究における諸問題——「評価」という言葉は一般に「価値の決定」と同義に考えられているが、本研究における用法を見てもわかるように、景観を対象とする場合には必ずしも価値的な判断に限定されない側面が存在する。景観へ持つ審美的側面や環境の快適性という情緒的側面を評価観点として強調することは往々にして見られることであるが、この様な観点自体既に判断主体である人間の側に存在する価値体系に引き寄せられているものである。これを景観の情緒性に関する問題であるとすれば、前価値的な判断に關わるのは景観の認知性の問題と言えよう。認知性はお客の属性や対象と対象系の関係性(「図」と「地」)の問題に依存する。ここで注意すべきことは、景観へ持つこの二側面のいずれが原因でいずれが結果であるかは一概には言えないということである。認知性が情緒性も相底的に規定していることは確かであるが、両者を明確に把握しておくことは景観評価の問題を混乱させないために必要な措置であると考えられる。この様な認識が問題の操作論的把握を背景としていることは言うまでもない。

前述の研究結果を上述の議論に結びつけて整理すると次の様になるであろう。代表的評価言語 19 は明らかに認知性の評価に關わるものであり、この尺度の評価自体は何ら価値的ではない。しかし尺度 10 とは負の相関にあり (FIG-2)、総合的な価値的判断に關係していることがわかる。また情緒性に關わる尺度としては 7, 11, 13, 17 等があげられるであろう。しかし 1 や 21 等は完全に情緒的価値判断の尺度に含まれるとは言い難いように思われる。現在、評価に際しての態度には「美的情動」・「連想による反応」・「



利用性(機能)を考慮に入れた嗜好」の三つが基準として作用していることが指摘されており、一般にこれらの基準を明確に分離して評価することは普通の人間には困難なことであるとされている^{*1}。今回の実験についても同様の事実が指摘でき、対象を客観化した評定を各被験者が行ない得たかどうかは疑問視せざるを得ない。これはテクスチャー(質感)に關する軸が明確に出てこなかった点に關連してくる問題でもあるが、評価尺度の選定の妥当性やSD法そのものの限界性についても検討すべき問題が残されている。しかし、このことは遂に非常にデリケートな問題に対してはむしろ経験的蓄積や多様な価値感に対する理解を持つた景観の専門家の判断に待つべきであることを示唆する警告であるとも考えられるだろう。

*1: I.C. Laurie "Aesthetic Factors in Visual Evaluation" in E.H. Zube et al. ed. "LANDSCAPE ASSESSMENT" Dowden, Hutchinson & Ross Inc.

*2: 高速道路調査会「道路景観に關する基礎的研究」

*3: 芝枯順「行動科学における相関分析法」東京大学出版会 1975

*4: 田中靖政「記号行動論」共立出版 1967